



そうですね、赤ちゃんと同時に、お父さんお母さんの心のケアも大事に考えて、いつも仕事をしているつもりです。

—してらっしゃるんですね。(笑)そんな日下先生に久しぶりにお話を伺ってまいりたいんですが、その前に日下先生、書道を嗜まれていると聞きましたよ。

—すごく恥ずかしいんですけども、実は僕、書道の二段なんです。

—すごいんですね。

いやいや、なかなかこの坂は長くてですね。十級から始めまして、今、二段なんですけども。

—すごい順調に行ってますね。

いや、全然順調じゃなくて。(笑)実は私、小学校の時に六年間、書道家の小森秀雲先生に書道を習っていました。大人になって様々な外国に行きますと、自分が日本人であることを非常に意識しまして、その中で日本の文化をもう一度しっかり学びたいなと思いました。それでこの歳になってもう一度書道を習いたいと思いついて、三年前、四十三年ぶりぐらいに、小森先生の教室に行かせていただきました。

小森先生が教室の机に座られて、書いた書をオレンジ色の墨で直されてるっていう姿が全く変わってなくて、すごく感動したんですね。それで、今続けさせていただいています。その小森先生は最近亡くなられたんですが、九十三歳で寿命を全うされ、後身の指導に情熱を傾けていました。僕にとっては書道だけでなく、人生の師でしたね。

—その書道を通じて、先生は子どもへの接し方について学んだと伺いましたが。

久しぶりに書道の教室に行った時、小森先生がおっしゃられることが印象深かったです。周りの方は師範級の方ばかりで、二十年、三十年と書道されてる方々ばかりの教室なんです。私みたいな初心者のような者が行っているといけないはずもないんですが、先生が「楽しんでください」とおっしゃるわけです。それで自分が一番初めに書いた書をですね、先生は花丸をくれるとついでに、百点つけてくださいました。この歳になって百点とかもつたことないですよ。(笑)

—ないですね。(笑)

—花丸もないですよ。(笑)

どこでも褒められないわけですよ。(笑)怒られることや非難されることはありますけど、誰も褒めてくれない。この歳だから、それが嬉しくて嬉しくて仕方ない。小森先生が、私が書いた書を持っていた時に直して下さって、少し考えてから一言、「もっと自信を持って書きなさい」っておっしゃいました。それで自分が同じ筆で同じ半紙で同じ字を書くんですが、全然字が違うんですよ。つまり、その言葉を信じて書くとのびのび書けるようになって、先生に言われた前と後で全然違うんですね。これはね、人間を育てる上の基本だと思っんですよ。つまり、「あなたはあなたのままでもいいから、もっと自信を持ってやったらいいんだよ」っていうことですよ。「こういうことが子育てや人と人との関係で重要だということをお自分で経験しましたね。なるべく、自分も実践しようとしてますけど、難しいね。(笑)

—でも、そうやって褒めたり、プラスの言葉かけてすぐく大事なんじゃないかね。

そうですね。小森先生は教室に四十人ぐらいの方がいましたが、一人一人見て観察されて、この方は仕事で忙しいんだなと思った時は、何も言わず丸をくれる。でも次の日に行った時にはすごくいっぱい直されるんですね。その人の状態をみて、声かけの仕方を変えてね、褒めていらっしやいました。

—半紙に書かれた文字を見るだけではなくて、どういう心理状態でそれを書いたのか。

そうですね。要はこうなんです。書道ってね、自分で書いて、先生に赤い筆で直される。つまり、心と心の通いなんです。それがね、日常生活ではなかなかないじゃないですか。例えば、夫婦で手紙の交換なんてしてないですよ。毎週、書を通してしていると不思議と安心感が生まれて、「また行きたい、自分の書を見てもらいたい」という欲求が出てくるんです。だから「心の」心と心の呼称「こころ」の「こころ」の呼び名が嬉しくて、それで続けていたんですよ。

—いいお話ですね。やっぱり人間見てくれているっていうのが分かる。

そうーこれね、夫婦で書道して、どっちか先生したらいいのかもしれませんが。交換日記したらいいんじゃないかなと思っつたのね。

—そうか、これが子育てにも通じるんですね。

それともう一つ面白かったのは、先生が自由創作を勧めるんですね。展覧会に出す時は、お手本の通り書いたら絶対駄目なんです。先生が素晴らしい字を書かれます。それを真似て書いたら、直されるんですね。つまり、「自分で考えろ」ってことなんです。だから、書道には臨書と言って、お手本を一字一句真似て書く書か方もあるんですけど、自由創作の時には自

分で調べて自由に書きなさい」とって言うんですね。自分の字を、個性を自由に伸ばすような指導をされるんです。だから、先生と全く同じような書き方じゃ駄目なんです。そんな書けませんけどね。(笑)

—その書道を通じていろんなことを学ばれたんですね。

そうですね。僕が書道を習いに行っているのは、それ以上に小森先生の人の接し方がすごく勉強になるからなんです。書道をしながら、それを垣間見させていただく。

—そうなんですか。では「リリスナー」の方からの質問にお答えいただけますでしょうか？

—はい、紹介させていただきました。四国中央市にお住まいのぶくちゃんです。

よく行くスーパーでは、周りにお構いなく鬼のように子どもを叱るお母さんを見かけます。「あれ欲しい」とキヤン泣きする子は、親のどちらか昔はこんな子どもだったんだろうなとスルーしますが、母親から理不尽に罵倒されている子どもがかわいそうで助けたいのですが、下手に声をかけない方がいいのでしょうか？という質問なんです。これはいかがですか。

—これは二つの視点があると思うんですね。「一つはその子どもを叱るお母さんの視点と、キヤン泣きする子どもとの視点ですね。」のキヤン泣きする子ども視点って、僕分かります。五年くらい前でしょいか。幼い頃に三越というデパートで買ったおもちゃが壊れた。五十年前、母が買ってくれないのでひっくり返って泣いた覚えがあります。それで「もういい加減にしろよ」と言っていた母に放っておかれて、十分くらい泣いてたんじゃなかな。だから「ゴジラ」としては「のキヤン泣き」というのは理解できます。そして、母も鬼のような顔してましたからな。「この場面はあんな思いますが、行き過ぎたんじゃないかも心配しますよね。」

—「の質問では、第三者が声かけをした方がいいのかどうなのかっていうんですが、悩ましいところかもしれないですね。

(鈴木)そうですね。お母さんがカッとした時には、何を言われても火に油をそそぐようなもので、インプットしてちゃいますよね。私も子どもが小さい時に、お店ではないですけど、子どもが道でひっくり返ってキヤン泣きしたことがあったんです。その時にお客さん待ちしていたタクシーの運転手さんが出てきて、「お母さん、大変だね」とって私に優しく声をかけてきたんですよ。それで私はすごく癒された。

—お母さんがお母さんか。

（鈴木）そういうふうな子どもがギャン泣きして、「お母さん大変だね、よく頑張ってるね」というような感じを言うことも。そういうすると大変さを分かってもうえたと、気持ちが悪くくふわわっとして怒りがすーっと収まっていく。

—「ちょっと我が返るぞ」と。

（鈴木）そういう感じがしました。

お母さんの理解者になって差し上げるといっていますね。

（鈴木）変に子どもに味方すると余計腹立ちますよ。」私が悪いのか「みたいな。

—なるほどね。

（鈴木）気にはしているんですよ。自分でわーわー叱りつけながらも、悪い親だと思わないか周りの目を気にしているんですよ。でも、子どもをキャン泣きさせたまま叱らないと、何もしない母親だと批判されるんじゃないかとも思う。だから周りの目に対して子どもを叱ってるという面もあるんじゃないかな。そういうの、ないですか？

—確かにね。公共の場であまりわーって泣かれると焦るのもあるし、なんでそんなに泣くのってこういうのもあって、もう怒ってるポイントが分からなくなってしまうよね。ですけれど、もうどうしようもないみたいなの、この場をどうにか切り抜きたいけれど、でもみんな見ている。

（鈴木）泣かせっぱなしのことと、こういう「圧力を感じる」。

—周りは母親に対して批判的になれないですか？

—そうか、そんななにもあるんだなあ。では次の質問です。坂出市にお住まいの白い旅人さん。もう少し初孫が生まれます。どうしても会えるのが楽しみなのですが、なにせこの「ご時世です。すぐに会えるのかどうかも分かりませんし、加えて新生児と接したことはなんてはるか昔のこと。今、赤ちゃんを迎えるにあたって娘夫婦はどうも勉強して頑張っています。が、祖父母になる私たちが最低限度に入れておくべきこと、そして娘達に頼られた時にどのようなサポートであればいいかなど何かアドバイスがありましたら教えてください。いいですか、と。どうですかね。お。お。お。

大事なことは、人間はチームで子育てをする存在だということを理解するということです。最近、



核家族が進んで、その中で子育てをしていくストレスなってるんですね。それで、子育ては初心者ですので、どうしていいか分からない。それでSNSなどから情報を得ると。そうすると、小さいことでもすごく重症になるようなことが書いてるので、不安感がすごく大きくなるんですよ。だから、周りの人が「そんなこといいのよ」と言っね、信頼する人がいらっやって、子育てを助けるんですよ。

それと赤ちゃんについては、今日까지きまで一ヶ月健診っていう、赤ちゃんが生まれた後のフォローをしたんですけど、一ヶ月になれば目を合わせる事ができるんですよ。面白かったのは、核家族でお母さんが初産の場合、赤ちゃんはあんまり目を合わせる事ができてなかったんですよ。でも、別の赤ちゃんはすごく僕の目を見る事ができるんです。聞いたらおじいちゃんおばあちゃんが常に抱っこして、赤ちゃんの目を見てあやしてるわけですね。だから赤ちゃんがどっしりして、すごくこやかな顔をしようとするんです。まだ一か月じゃできませんからね。でも、目を見るんです。

そのように赤ちゃんに対しても多人数で目を見て、接してあげる。きょうだいでもいいんですが、目を見るっていうことは人間の発育上とても大事で、僕ももっともつとすべきだと思いますね。だから大事なことは、育児はお父さんお母さんだけでなくなっていいんですよ。頼ればいいんです。おじいちゃんおばあちゃん皆でね、共有してほしいなと思いますね。僕は本当にこれ大事だなと思いますね。

—そうですね。だから、白い旅人さんもブランドがあるし、子育てに不安があるのかもしれない。でも、ちゅと抱っこして笑いかけられるだけ、それだけでも大きなことなんですよ。

「ね、僕、ビタタシ（EYE=愛）って言ってます。目と目を合わせて、「あなたのことが好き」と一回一回言いたいんですよ。皆、言うちゃえば、心がでかくなるわけですよ。今、教育って言ったら、脳には内部の脳と表面の脳が二つありますが、表面の脳のことばかり言いますよね。計算したり、言語を話したりするときに使ってますが、そういう面の教育はっかりじゃなくて、本当に大事なのは心なんですよ。内部の脳ですね。そこを育てるのは赤ちゃんのうちですから。その赤ちゃんの時期にしっかりと愛情をあげて脳を作るのは大事だと思いますけどね。

—「最近の非認知能力」というような言葉でも言われますけども、そういうった本場に「コミュニケーション能力」だったり、人としての本質的に大事なところをしっかりと育む期間でもあるわけですね。

本当にそうなんです。人間だから教育しなきゃいけないことってあるんですよ。それは僕らの本能にあるんです。だから育児書でいろいろ参考にされるかもしれないんですけど、それじゃなくて本当に僕らが子どもを見て嬉しく思っつ気持ちとか、「ニッコ」とする表情とかそれが大事だと思っなめ。

—もう生まれた瞬間から大事なんですね。

本当にこのように思いますよ。

—いいアドバイスをいただきましたね。家族で、チームでやっていくことですね。すごく勉強になったなと思います。曰下先生には今後もしスナーの方から届いたお悩み、子育てに関するお話など、また聞かせていただきたいなと思いますのでよろしくお願いします。また新たに習い事が始まった時には教えてください。

もう少し書道が昇段した時にですね。(笑)

—いやいやそう言わずに、また来ていただけたらと思います。今日は、鈴木先生、そして曰下先生もお越しいただきありがとうございました。

ありがとうございました。